

息づく叙景

——蕭綱文学の美質——

福井佳夫

蕭綱^{しょうこう}（五〇三—五五二）の文学は、じつに豊穡である。

彼の文学でもっとも有名なのは、宮体詩をふくむ詩ジャンルであろうが、彼の作品は、詩だけではない。

文章方面でも、じつに多様である。ジャンルだけあげれば、詔、令、教、表、啓、書、序、論、賦、頌、銘、碑、墓誌、墓誌銘などがあり、韻文、散文、政治的文書、学術的文書、文学的文書など、なんでもござれという印象がある。さすがは幼時、父帝（蕭衍）から、「この子はわが家の東阿（曹植）だなあ」と嘆じられただけのことはあるといえよう。

さらに彼がかいたものは、詩文だけではなくた。おおくは佚しているが、経史子や仏教に属する『礼大義』『長春義記』『老子義』『莊子義』や、『昭明太子伝』『諸王伝』『法宝

連璧』などもあったという。かくみると彼の著述は、まことに多種多様だったといわねばならない。

かく豊穡すぎるため、蕭綱の文業全体をみわたし、統一的にその文風を解説し、評論してゆくのは、簡単ではない。現時点（二〇二一年末）で参照できるものとして、年譜に呉光興『蕭綱蕭繹年譜』（社会科学文献出版社 二〇〇六）などがあり、テキストへの注釈としては肖占鵬・董志広『梁簡文帝集校注』（南開出版社 二〇一五）が刊行されている。前者は考証がゆきとどき、たいへん有用なものであるが、後者のほうは、校注がやや簡略にすぎ、まだ十全なものとはいえない。その意味で、蕭綱の詩文を正確に読解し、解釈してゆくのは、現状ではなお困難だといわねばならない。逆にい

えばその分、やりがいのある課題だといえよう。

本稿は、そうした蕭綱文学研究の第一歩として、詩ジャンルをとりあげてみたい。

羅宗強『魏晋南北朝文学思想史』（中華書局）によれば、残存する彼の詩は、二百九十四首にのぼる。うち、艶情に属するものが百十二首、仏教の理をかたつたものが十四首、詠物詩が四十八首、これ以外の侍宴、応詔、応令の詩が二十五首、その他（遊仙、宴遊、閑適、述懷など）が九十五首だという（三〇〇～三〇一頁）。

こうした分類や篇数は、解釈や数えかたの相違によって変化してくるので、絶対的なものではない。ただそうであつても、これによって、蕭綱詩の大意が理解できるし、またその作風の幅ひろさもうかがえるだろう。彼はけつして、艶詩だけの詩人ではなかつたのである。

かく幅ひろく多様な詩風をもつ蕭綱だが、彼の詩の最良の美質は、那邊にあるのだろうか。その候補として、艶情のあだつぼさ、仏理の深遠さ、詠物の機知、閑適の閑雅さなど、いろいろあげられるだろうが、どれがもっとも価値があり、称賛されるべきだろうか。

こつした最良や美質などを論じる場合、なにを「最良」とし、なにを「美質」とみなすかは、ひとによって、さまざまだろう。したがって、いかにのべ、いかにかたつたとしても、主観的であることをまぬがれない。しかし、それはやむをえないことだ。本稿では、主観にわたるのをおそれず、自分なりの見かたをのべてみようとおもう。

一 清麗な叙景

これまで蕭綱の詩文をよんだなかで（もちろん全部ではないが）、私がかつとも感心し、いいなあとおもつたのは、艶麗な詩賦の類でなく、景物を叙した書翰文だった。

たとえば二十九歳、立太子の直後に書いた「与蕭臨川書」がそれである。この書翰は、地方の臨川に赴任した蕭子雲を慰勞したものである。全体を紹介するとながいので、感心した叙景句だけしめすと、

零雨送秋、江楓曉落、
輕寒迎節、林葉初黃。

しずかにふる雨が、秋のおわりをつげ、肌ざむい冷氣

が、冬の到来を感じさせます。長江周辺の楓は払曉に葉をおとし、林の木々も黄変しはじめました。

というものである。

この四句、語句の奥に秘められた作者の感受性が、たいへんすばらしい。時節がうつりゆく気配を、繊細かつ鋭敏にうつしとっている。時刻は、「江楓は曉あかつきに落ち」とあるから、早朝をむかえたころだろう。ある晩秋の日の明けがた、蕭綱は、江辺にふる「零雨」や木々の変化によって、初冬の到来に気づいたのである。

私見によれば、この四句は、ただ時候がうつりかわっているとか、色彩がきれいだとか、そんなあたりまえのことを、かたっているのではない。彼はこのとき、肅々たる天の運行を感じとったのではないか。天行は健にして、なんの狂いもない。じつさい、いま、自分の眼のまえで、零雨が秋をおくりさるうとしている。蕭綱はそうした肅々たる天の運行にハッと気づき、畏敬の念をいだいた。だから、その天行に敬意を表し、晩秋の朝、秋をおくり、冬をむかえているようすを、しずかにみまもっている——この四句、私にはそのように感じられる。鋭敏な感受性によってつづられた、清麗きわまる

叙景句だといえよう。

この書翰文は、もう一か所すばらしい叙景の句をふくんでいる。それは、

白雲在天、瞻之岐路、眷慨良深、
蒼波無極、

白雲が空につかび、青波は無限につづきます。あなたが出発した航路を目にすれば、まことに感慨ぶかいものがあります。

というものである。白雲と青波の対偶は、蕭子雲が旅途でくわす景色を想像したものだろうが、よむ者に広大無辺な空間を感じさせる、秀逸な字句だといってよからう。

こうした叙景で留意したいのは、叙された景物が、ひと（作者）にみられるだけの存在ではなく、意思を有するかのごとく描写されていることである。さきにみた「零雨」云々においても、零雨や軽寒は、それ自身が意思をもって秋をおくり、冬をむかえているのであって、なんとなく季節が変化しているのではない。おなじく白雲や青波も、みずからの意思として天に存在し、長江にたゆたっている——。現実としては、そうではないのだろう。しかし、蕭綱の擬人法めいた

叙しかたによって、そういうふうに感じられるのである。

蕭綱のすぐれた叙景には、こうした印象を有するものがある。景物が意思をもち、無生物が情感を有するがごとく感じられるのである。それゆえ彼の叙景には、「私（蕭綱）が景物をみた（きいた、なにかだとした）」だけでなく、「景物がひろがる（よこたわる、なにごとかをなす）」という叙しかたもすくなくない。

こうした景物が意思を有するような叙景句は、もちろん書翰文だけにみえるのではない。本稿が注目する詩のジャンルでも、同種の名句がすくなくない。ここでは私の主観でなく、旧時の文学批評家に指摘されたものをあげてみよう。たとえば「侍遊新亭応令詩」には、つぎのような叙景の句がある。

沙文浪中積 川浪の底に沙の模様ができ

春陰江上来 江辺に春がすみがただよう

柳葉帶風転 柳葉は風にふかれてまろび

桃花含雨開 桃花は雨にぬれながら開花しているよ

標題に応令とあるので、おそらく兄の蕭統に命ぜられてつくったのだらう。帰青『南朝宮体詩研究』三百五十三頁では、揚州刺史だったときの作とする。ここでは、新亭からみた春

の川景色が、さつと一筆書きのように叙せられている。

ところで、明末清初の陳祚明は『采菽堂古詩選』巻二十二で、この詩の「沙文」云々の聯をとりあげ、「生致饒かなり」と評している。ここの「生致」というのは、生き生きした致おもむきという意であるが、景物（沙文、春陰）が意思を有するかのよう、といいかえてもよからう。この聯の下句「春陰江上来」を例にとつていえば、「春がすみ（春陰）が、おのれの意思をもって、長江のそば（江上）へやってきた」というふうに、陳祚明も感じたのにちがいない。

おなじく蕭綱の「贈張纘詩」にも、つぎのような叙景句がある。

三春澧浦葉 春季には澧浦の地に緑葉がしげり

九月洞庭枝 九月には洞庭あたりは樹枝だけになる

洞庭枝嬾娜 洞庭の樹枝は優艶にはりだし

澧浦葉參差 澧浦れいほの緑葉もさきみだれるだらう

芬芳与搖落 そうした緑葉の芳香と樹枝からの落葉

俱應傷別離 どちらも惜別の情をおこさせてくれるなあ

この六句に対しても、陳祚明は同書で「生姿を揺曳ようつえいせり」と好意的に評している。生姿を揺曳するというのは、おそら

く澧浦の緑葉と洞庭の樹枝が、いきいきと眼前でゆれているかのようだ、ということだろう。ここの「生姿」も、さきほどの「生致」と同種の意味あいにはがいない。とすれば、彼はこの詩でも、澧浦の緑葉と洞庭の樹枝とが、おのおのそれ自身の意思をもってしげり、さきみだれているなあ、と感じたのではあるまいか。

私は、かく「生致」「生姿」と評されるような叙景こそ、蕭綱文学の精華であり、もっともすぐれた美質ではないかとおもふ。それは、いわば景物や風光が命をふきこまれ、息づいているような描写と違ってよからうか。本稿では、こうした、命をふきこまれたような叙景を、「息づく叙景」「息づく描写」などと称することにしよう。

文学史のうえで、蕭綱はつねに艷詩が注目され、言あげられてきた。だが、彼の文学の最良の美質は、艷情がむしろすこけつとりより、この息づくような叙景に存しているのではないかと、私はおもふのである。

二 雍州での戦争体験

蕭綱はなぜ、こんな息づく叙景をつづれたのか。

それは、雍州刺史だったころ（五三三―五三〇、二二歳―二八歳）、彼は、北魏の軍とはげしい攻防をくりひろげたが、そのときの戦争体験が、彼の感受性や観察力をきたえたからではなかったか。たとえば彼が、まさにその雍州刺史だったとき、友人の張纘にあててかいた「答張纘謝示集書」がのこっているが、そのなかにつぎのような一節がある。

伊昔三辺、久留四載、

胡霧連天、
征旗弘日、
遙聽塞笳、

或郷思悽然、是以
沈吟短翰、寓目写心、因事而作。
或雄心憤薄、
補綴庸音、

私は以前に西辺の雍州に赴任し、いままで四年も駐屯しております。ここでは、胡地特有の濃霧が空にみち、わが征旗に光がそそぐなか、ときどき村里の笛音がきこえ、とおくから要塞の笳声がきこえます。

すると私の心に望郷の念がぎざし、また勇猛な精神

がわきおこつてくるのです。こうして私は、短詩を吟じて、下手な詩句をつづります。そして風景をみて思いを叙し、各様のできごとに応じて詩をつくつてゆくのです。

呉光興『蕭綱蕭繹年譜』によると、この書翰は大通元年（五二七）、蕭綱二十五歳のときの作だという。この時期、蕭綱は雍州の地で、北魏との戦い（穰城の包囲戦）とくにはげしかった）にあけくれていた。そうした戦闘のあいまに、この書翰文はかかれたのである。

まず、「胡霧」云々の二聯に注目しよう。ここでは、蕭綱は、天が運行する音ではなく、笛音や笳声の響きに耳をかたむけている。彼はなぜ、そんなに笛音にききいつているのか。執筆時の状況をかんがえれば、たんなる風流や気ばらしのためだけではなかつたろう。

ひよつとすると蕭綱は日々、戦場で笛の音をききわたることによって、北魏軍の気配や動向をうかがっていたのかも知れない。今日はなぜか、いつもきこえる村里の笛音がきこえてこない。さらに、「北魏軍の」要塞の笳声がきこえはするが、いつもとはちがって、ただけしい響きがする。もしか

したら北魏の連中、明日にでも一斉攻撃を企図しているのかもしれない。よし、今晚そつと間諜をはなつて、敵軍の動きを偵察させてみよう——などと。

これは、うがちすぎた想像かもしれない。ただそうとはいえず、この書翰中の「胡霧」や「征旗」などの語は、戦争を示唆するものであり、なんとなく不穏な雰囲気を読ませている。じつさい、いま蕭綱がいるところは胡地であり、塞笳がきこえる戦場なのである。

とすれば、この一節、気らくそつに笛の音をきいているが、このとき蕭綱は、戦いの指揮をとっていたのかもしれない。さらにいえば、この書翰をつづっている蕭綱の視界には、敵兵の姿がうつっていたのかもしれない。そうした戦闘のさなか、あるいはその合間（あいま）をぬつて、この書翰はかかれたのかもしれない。

ところで、戦場で笛音をきいた蕭綱は、それからどうしたのか。彼はつづけていう。「心に望郷の念がきざし、また勇猛な精神がわきおこつてくるのです。こうして私は、短詩を吟じて、下手な詩句をつづります」と。つまり彼は、胡地の笛音に詩心を刺激されて、「短翰」や「庸音」、つまり詩をつ

くつたのだった。おそらく戦いが一息つき、しばらくの安息にめぐまれたので、詩をつくれたのだらう。このように文学創作の立場からみると、雍州での戦争体験は、彼に詩をつくるきっかけもあたえてくれたのである。

では、蕭綱の戦争体験とは、具体的にどんなものだったのか。そしてその体験によって、どんな詩をつくったのか。それらが推察できるのが、彼の辺塞詩と称される作品群である。

辺塞詩といえば、文学史の上では、盛唐の高適や岑参、王昌齡らの名篇がよく知られている。ただ、もし辺塞詩を、「辺境の風土や自然、さらにそこで発生する「異民族との戦争などを叙した作」と定義したならば、蕭綱のいくつかの詩も、そう称されてよからう。じつさい、林大志氏の御論「論蕭綱的辺塞詩」（『河北大学学报』二〇〇〇 五。のち『四蕭研究 以文学为中心』に収録）によれば、蕭綱の詩中、九篇の作（いずれも楽府題をもつ）が、その辺塞詩に該当し、またそれ以外の六篇にも、同種の語句がみられるという。そうだとすれば蕭綱の詩中、狭義には九篇、広義には十五篇が、辺塞詩に属するとしてよからう。そうしたなかから、蕭綱の戦争体験がうかがわれる詩句をひいてみよう。

従軍行

雲中亭障羽檄驚 雲中の辺塞では羽檄におどろき

甘泉烽火通夜明 甘泉宮では烽火は夜とおしだ

隴西行第二首

隴西四戦地 隴西の地は四方が敵だらけ

羽檄歳時聞 羽檄が歳時ごとにとどくほど

雁門太守行第二首

隴暮風恆急 丘隴は日がくれ風がつよい

関寒霜自濃 要塞はさむく霜がおりている

櫜馬夜方飼 「夜襲せんと」深夜に馬に餌をあたえ

边衣秋未重 秋でも重ね着はしない

潜师夜接战 軍を潜行させて夜に奇襲をかけ

略地曠摧鋒 敵陣をつばい朝に反撃をおわらせた

從頓暫還城詩

舞觀衣常襲 「多忙で」舞台では衣装がたたまれ

歌台絃未張 演台の琴は絃^{いと}もはられておらぬ

持此横行去 軍務にしたがって東へ西へ

誰念守空牀 妻妾の独り寝などおもしろい暇もない

これらの内容は、詩中のものなので、そのまま事実である

とはみとめがたい。ただ、戦争体験があればこそ、かけたものではあろう。戦場での蕭綱は、羽檄がとびかうなか、敵襲におびえたり、夜襲をかけんと意気こんだりする、苛烈な日々をおくっていたのである。三例目の「秋でも重ね着はしない」は、夜襲をかけるには、身がでなければならぬから、こういったのだらう。

戦場では、いろんなことに警戒し、敏感でなければならぬ。たとえば夜がふけたころ。風でざわめく木の葉、あたりをおおう漆黒の間、そうしたなか、ふとひとの気配が感じられた。アツとおもいきや、瞬時おおきな怒号があがり、敵の兵士がなだれこんできた——蕭綱は、こうした経験や見聞を何度かしてきたはずだ。木の葉のざわめきには、敵兵の足音がまじっているかもしれない、暗闇にまぎれて敵兵がひそんでいるかもしれない。戦場では、そうした心がまえが必要であり、また不可欠であったのだらう。

つねに五感をとぎすませ、周囲への警戒をおこたらない。そうした日々をすごす蕭綱からすれば、木の葉や暗闇も、けつしてたんなる無生物や景物ではなかった。そのざわめきや奥底から、いつ敵が牙をむき、おそいかかってくるかもしれない、

ぶきみでやつかしいな存在にうつったことだらう。そうした経験をかさねるうち、彼は、周囲の気配をさぐる感受性や観察力が、するどくなってきたにちがいない。

かくみてくれば、さきにみた「与蕭臨川書」中の、「零雨秋を送り 輕寒節を迎う」云々の叙景も、べつの見かたができるようにももう。この書翰じたいは、建康での立太子後のものであり、戦争ただなかでの作ではない。しかし、ここに見える繊細な感受性は、戦争体験があつたからこそ、きたえられ、みがきあげられたものではなかったか。

かつての日、蕭綱は北伐軍の総司令官として、冬の到来やその時節における戦略を、つねにかんがえていたはずだ。まもなくやつてくる寒冷の日々。寒さになれぬわが梁軍は、この時期の敵の攻撃にくるしむにちがいない。とすれば冬季における要塞の防御態勢を、いかに準備し強化しておくか。戦闘用の刀剣や弓矢だけでなく、防寒用の外套、手袋、靴、燃料、食糧なども、はやいうちから用意しておかねばならぬ——などと。気象や寒暖への敏感さは、戦局の帰趨にもひびいてくるからである。

そうした蕭綱であれば、「雍州刺史の任をおえて」建康に

かえったあと、時節の移りかわりに敏感にならざるをえなかったらう。

しずかにふる雨、肌ざむい冷氣、これらによつて、蕭綱はだれよりもはやく、時節の変化に気づいた。そしてその鋭敏な眼で、長江の周辺をみわたしてみると、たしかに、楓は葉をおとし、木々も黄変しはじめている。ああ、天行健なり。いままさに、秋がおわり、冬がやってこようとしている。こゝろもうやいなや、ふと彼の脳裏に、「零雨 秋を送り」云々の語句がうかびあがつてきた……。

三 息づく詩句

そうした苛烈な雍州時代をへて、二十八歳のとき、蕭綱は揚州刺史として健康にかえった。そして翌年、兄の急逝をうけて皇太子となり、以後はずっと繁華な健康で、監国撫軍にいそむ身分となった。辺地の雍州とは、すっかり様が変わりした境遇となつたのである。

では、健康への帰還以後、戦争体験できたえられた蕭綱の感受性や観察力は、どうなつたのだろうか。

もちろん、きえてなくなつたのではない。そもそも、「零雨送秋」云々や「春陰江上来」云々の息づく叙景は、雍州をさつたあとでかかれたもののなのである。

ただ詩の内容に、顕著な変化が発生した。それは、彼の詩から、辺塞や戦争の話題がとぼしくなつたということである。そしてそのかわり、艶情を叙した内容がおおくなつてきた。これは、とうぜんのことだらう。繁華な都である健康には、雍州のごとき軍用の要塞や施設はありえない。彼の周囲から、ものものしい軍装の將兵たちの姿がきえ、艶美な歌姫や妓女たちがふえてきた。彼自身も、北魏軍との戦争対策に神経をすりへらすことも、健康への望郷に心をいためることも、なくなつてきたのである。そつであれば、彼がつくる詩から、辺塞や戦争に関する話題がうすれていったのも、とうぜんのことだらう。

もっとも、健康に帰還したのち、彼は艶詩だけつくつていたわけではない。それ以外にも、たとえば「右の羅宗強氏の分類にしたがうと」侍宴や応詔、宴遊、閑適などの詩もたくさんつくっている。これらの作のなかに、右でのべたような息づく叙景がすくなく登場し、当該の詩に、ふかい陰翳

をそえているのである。

この章では、そうした艶詩以外の詩から、息づくような叙景をさがしてみよう。蕭綱の詩は創作年がわかりにくく、いつの作とは断定しにくいものがおおい。内容面から推測していきながら、以下で、この時期（建康帰還以後）とおもわれる詩を、いくつか紹介してみよう。

高風度函谷 空たかく秋風が函谷関をわたつてき

墜露下芳枝 露は樹枝におりている

緑潭倒雲気 潭水は雲をさかさまに映じ

青山銜月規 青山は月をくわえこんでいる

花心風上転 花芯は風でころびゆき

葉影樹中移 葉影は樹中でうつりゆく

外遊独千里 郊外にでて千里にひとり

夕嘆誰共知 タベに嘆じてもだれが気づこう

これは「秋夜」と題された詩で、右ですべてである。この詩、末二句以外はいずれも、景物が主語の擬人ふう書きかたがされており、息づく叙景だといってよからう。とくに冒頭の「高風」句は、あたかも秋が意思をもつて函谷関をわたってきた、という印象をあたえる。また「緑潭」二句も、たん

なる山水描写でなく擬人的に叙されているのに注意しよう。緑がかつた潭水が雲を「倒」にうつし、青山が月を「銜」えているのである。

つづいて、いろんな詩中から、息づくような叙景の句をさがし、それをぬきだしてみよう。

(1) 納涼

避暑高梧側 暑さをさけんと高梧の樹の蔭にはいると

輕風時入襟 微風が襟へはいってきた

落花還就影 花も影をえらんで落下し

驚蟬乍失林 蟬もさつと林のなかへにげこんだ

(2) 秋晚

浮雲出東嶺 浮雲は東嶺のほうにでて

落日下西江 落日は西江にしないでゆく

促陰橫隱壁 影は横ざまに壁をかくしてゆき

長暉斜度窓 夕陽はななめに窓をわたつてゆく

(3) 晚景納涼

烏棲星欲見 烏はやすみ星がでてこようとし

河淨月応来 流れはすみ月がのぼつてきそう

(4) 蒙預懺悔詩

庭深林彩艶 庭は奥ぶかく林中の樹々が林が妍をきそい
地寂鳥声喧 地は寂然なるも鳥がさわがしい

(5) 和湘東王首夏

欲待華池上 池のそばでまちつづけられ

明月吐清光 明月が清光をはなちはじめた

ここにあげた詩句は、いずれも擬人ふう表現がなされていることに、ご注意いただきたい。各事例に解説をつけておこう。

(1) は標題が「納涼」であるので、あつい夏の作だろう。夏のさかり、ひとは木の蔭にすずむが、花や蟬までも、すずしいところへ逃避しているという、すこしユーモラスな詩句である。花や蟬が、ひととどうよう、意思をもって暑さからにげだしているかのようだ。

(2) でも、秋の夕暮れ、影がひろがってゆくのを、「壁をかくしてゆき」と表現し、夕陽が移動してゆくのを、「窓をわたってゆく」とつづっている。ともに、影や夕陽が意思をもちつつ、「壁をかくし」「窓をわたってゆく」かのようだ。つまり、息づく叙景になりえているのである。

また(3)では星と月、(4)では林と鳥が、擬人ふうにならされて

いる。これらの表現、星や月のかわりに、美人や良人などの語をいれても、そのまま通用するであろう。

そうしたなか、とくに秀逸な表現だともおられるのが(5)である。二句目「明月 清光を吐く」という言いかたは、ただの擬人ふう表現をこえて、まさに、卓越した息づく描写であり、叙景であるといつてよいのではなからうか。

このようにどの例も、無生物が情感を有し、景物が意思をもっているかのような印象をあたえる。私は、こうした表現は、ただ「擬人法をつかったもの」だけでかたづけるのではなく、蕭綱の鋭敏な感受性や観察力にむすびつけて、理解すべきではないかとおもつのである。

こうした表現の淵源は、やはり雍州における彼の苛烈な戦争体験にあるのだろう。そこでの体験が、蕭綱の感受性や観察力をするどくしたことは、前述した。そうした感受性や観察力が、こうした詩句をうんだのではあるまいか。

たとえば、「影は横ざまに壁をかくしてゆき 夕陽はななめに窓をわたってゆく」(長暉斜度窓、促陰横隱壁)のごとき擬人ふう表現、さらにそうした擬人化のむこうに生じる、「明月が清光をはなちはじめた」(明月吐清光)の息づくよう

な描写は、雍州での戦争体験がなければ、うまれてこなかったのではないかとおもわれる。とすれば、

雍州での戦争体験

鋭敏な感受性や観察力

（擬人ふう表現）

息づく叙景

と関連づけることも、それほど荒唐無稽な連想ではないようにおもふ。

こうした擬人ふう表現や息づく叙景は、概して季節の移ろいに關したものがおおい。だが、右(4)の「庭は奥ぶかく林中の樹々が妍げんをきそい」云々は、「蒙預懺悔詩」中にあるものであり、仏教に關連した詩である。つまり、擬人ふう表現や息づく叙景は、内容を問わず、どんな詩であっても布置されるものであり、じつさい、蕭綱はそうしている。おそらく習性となつて、こうした表現や叙しかたが、いろんな詩文のなかにでてきた、ということだろう。

もちろん戦争に従事した者がすべて、こうした息づく叙景をつづられるようになるわけではない。ただ、この蕭綱は、父帝によつて曹植の再来と嘆じられ、七歳にして詩癖あつたという、天与の才の持ちぬしだった。そうした彼にとつて、かつての雍州での日々は、詩囊をさらにゆたかにするものだったのだらう。

その意味で、雍州とそこでの戦争体験は、彼の感受性や観察力をみがきあげただけでなく、息づく叙景をつづる能力も付与したといつてよからう。私は、当時において、この蕭綱こそ、ひんぱんに、そして巧緻に、こうした息づく叙景をつづれた文人、あるいはそのひとりだったらう、とおもふのである。

四 艶詩中の叙景

こうした「息づく叙景」や「息づく描写」は、艶詩のなかでも利用されている。

艶情と叙景とは、いっけん水と油のごとく仲がわるいようにおもわれる。しかし意外にも、それほど相性あいしやうせいはわるくな

かったようで、ときに艶詩中でもなかよく同居している。もちろん、中心は艶情がしめているのだが、叙景はそれをひきたて、きわだたせる役目をはたしている。つまり楚々たる、あるいは妖艶な美女の背景となつて、閨怨の情趣をたかめ、雰囲気をもりあげているのである。

まず、叙景が比較のおおい艶詩からあげよう。すると、つぎの「秋閨夜思」がそれだろう。

非関長信別	離縁され長信宮に隠棲したのでなく
詎是良人征	良人が出征したのででもない
九重忽不見	だが思いびとが不意に姿をけし
万恨满心生	私の心は後悔ばかり
夕門掩魚鑰	夕べの門は錠前をとざし
宵牀悲画屏	寢室の屏風のまえでかなしむ
迴月臨窓度	月の光は窓をめぐりゆき
吟虫繞砌鳴	鳴く虫が石畳で声をあげる
初霜隕細葉	初霜は細葉をおとし
秋風驅乱螢	秋風が螢をおいやつてゐる
故粧猶累日	あらたに化粧もせず
新衣製未成	新衣もまだできあがらない

欲知妾不寐 私の寝もやれぬ心情たるや

城外搗砧声 城外にひびく砧きねたの音のようだ

この詩は、思いびとが不意に姿をけしてしまったため、のこされた女性がせつない思いをかたつた、閨怨ふうの内容である（これで全部）。とすれば、やはり艶詩に分類されるべきだろう。

そうしたなかに、七句目「迴めぐる月は窓に臨わたみて度り」云々の叙景が、四句にわたつて挿入されている。この四句、「迴月」は「吟虫」は「初霜」は「秋風」などと、無生物を主語とした擬人ふう表現をとつていて、晩秋の気配をかもしたしている。とくに「初霜は細葉を隕おとし」秋風は乱螢を驅かる」は、たくみに秋冬の交替を暗示したものであり、本稿の冒頭に提示した、あの「零雨は秋を送り、輕寒は節を迎う」を彷彿させる思づく叙景だといえ、すこしほめすぎだろうか。ところで、すぐ気づくことだろうが、詩全体からみれば、この四句は直後の「故粧もて猶なお日を累かさね」云々の閨怨をひきだす、興きようふつの役わりをはたしている。ものさびしい晩秋の景物を前置して、女性の悲しみをひきだそうとしているのである。思づく叙景が、閨怨の先ばらい役をつとめている

ともいえるようか。

もちろん、艶詩のすべてが、こうした叙景の句を前置しているわけではない。ただ、艶詩中に叙景があると、閨怨にしろ、舞いすがたにしろ、化粧場面にしろ、よりつよく、惻惻とした情趣がかもしだされ、女性の美がひきたてられるようだ。じつさい、右の詩で、もういちど、「迴月」四句を略してお読みいただきたい。艶情ふう詩句だけだと、なにか一本調子で情趣がとぼしいように感じられないだろうか。

『詩』の六義のなかに、賦^ふ、比^ひ、興^{きよう}の三叙法があることは、よく知られている。これを艶詩に適用させれば、艶情だけで終始するのが賦であり、叙景をまじえるのが興や比にあたるう。やはり賦の叙法だけでなく、興や比もまじえたほうが、単調にならず、情趣がただよい、風情がひきたてられるようにおもわれる。

同種の、叙景が艶情をひきたてている例を、いくつかあげてみよう。まずは「倡楼怨節」と題される詩。

朝日斜来照戸 朝陽が斜めにやってきて戸にさしこみ
春鳥争飛出林 春鳥がぎそって林をとびだす
片光片影皆麗 日向も物陰も気もちがよいが

一声一轉煎心 鳥のさえずりに私の心はいらつく

上林紛紛花落 上林では花がヒラヒラまいおち

淇水漠漠苔浮 淇水では苔がひっそりうかぶ

年馳節流易尽 歳がすぎ時節がかわりゆくなか

何為忍憶含羞 私の思いを告白せずにいられようか

この詩は標題からみれば、青楼にいる女性が、ひそかに思ひびとをしつつているのだらう（これで全部）。鳥のさえずりに心がいらつく（四句目）のは、自分の容色がしだいにおとろえてゆくから。だから、はやくあのひとに告白せねば（末句）——というところか。「朝日斜めに來たりて戸を照らし」春鳥争い飛びて林を出づ」や、「上林に紛紛として花落ち」淇水に漠漠として苔浮かぶ」の対偶は、例によって、朝日が、春鳥が、花が、苔が、と擬人的な描写である。こうした叙景によって、あとにでてくる艶情（末二句）をひきたてているのに注意しよう。

つづいて、「倡婦怨情十二韻」という詩をあげよう。

綺窓臨畫閣 綺窓は絵模様の部屋にあり
飛閣繞長廊 飛閣は長廊にとりまかれています
風散同心草 ふく風は同心草をゆらし

月送可憐光 月は風情ある光をはなっている
 髣髴簾中出 おぼろげに簾中よりでてきた
 妖麗特非常 世にもめずらしき妖麗な美女

……

この詩は、後半を省略した。右の三・四句目「風は同心の草を散じ、月は可憐の光を送る」が、擬人ふうの息づく描写である。この二句は、上二句とともに、直後の「妖麗」な美女（髣髴として云々）を、あでやかに詩中にひきいれている。ここでも、息づく叙景が女性の妖麗さをきわだたせているのである。

また、「同劉諮議詠春雪」と題された詩もあげてみよう。

晚霞飛銀礫 夜の霞は銀の小石をとばすよう
 浮雲暗未開 浮雲がたれこめて隙間もないほど
 入池消不積 雪片は池におちてつもらず
 因風墮復來 ただ風にふかれ浮揚するばかり
 思婦流黃素 思婦は黄絹をおりつづけ
 温姫玉鏡台 美人は化粧台の鏡のまえ
 看花言可挿 花をみて髪にさすというが
 定自非春梅 それはたぶん春梅ではなからう

この詩は、すべて引用した。例によって前四句が、景物を主語とした（「晚霞は」、浮雲は」など）擬人ふうな息づく描写である。こうした四句でやはり、詩的な情景を設定し、そのあとに思婦や美人を登場させている。この詩も、美女の描写が主だとすべきだろうが、叙景を前置することによって、女性の美しさをきわだたせているのである。

五 息づく美女

さて、ここまで、戦争体験によってきたえられた感受性や観察力は、建康帰還後、蕭綱の詩文に「息づく叙景」や「息づく描写」を生じさせた。また艶詩のなかでも、興的叙法として活用されている——とのべてきた。最後に、戦争体験に由来する彼の能力は、艶詩中で「興的でなく賦ふう」に「女性描写をするうえでも、またおおいに役だっていることをのべておこう。

たとえば、蕭綱がかいた艶詩のなかでも、代表的な作としてしばしば挙例される「詠内人昼眠」という詩をあげてみよう。

北窓聊就枕 北の窓で「美女は」枕についてひと眠り

南簷日未斜 南の檐では日はまだかたむかない

攀鉤落綺障 鉤をひいて帳をおろし

挿揅拏琵琶 撥をおさめて琵琶をかたづける

夢笑開嬌靨 夢中でわらうとえくぼがで

眠鬟圧落花 髻が落花のうえにかかっている

簾文生玉腕 敷物の編み目が玉の腕にうか

香汗浸紅紗 汗が紅紗にしみこんで

夫婿恆相伴 この女は夫がいるのだから

莫誤是倡家 妓女とまちがえてはならぬぞ

この詩は、昼寝をしている美女を「賦的叙法によって」えがいた詩である。美女の昼寝、さらにその美女がうつすらと汗をかき、その汗が紅紗にしみている場面が、たいへんコケティッシュで、魅惑的であるとされてきた。

ところが、べつの見かたをすれば、そうした描写のしかたは、本稿冒頭でみた「零雨送秋」云々をつづつたのと、おなじ感受性や観察眼によったものではないだろうか。ここで再度、書翰中の駢句をあげて、この艶詩の詩句とくらべてみよう。

「零雨送秋、江楓曉落、
輕寒迎節、林葉初黃。」

しずかにふる雨が、秋のおわりをつげ、肌ざむい冷氣が、冬の到来を感じさせます。長江周辺の楓は払曉に葉をおとし、林の木々も黄変しはじめました。

夢笑開嬌靨 夢中でわらうとえくぼがで

眠鬟圧落花 髻が落花のうえにかかっている

簾文生玉腕 敷物の編み目が玉の腕にうか

香汗浸紅紗 汗が紅紗にしみこんで

この駢句と詩句、前者は時節の変化を叙し、後者は美女の昼寝をえがいたものである。前者は清麗な叙景を意図し、後者は艶冶さを追求したもので、まったくちがったものだといえ、それはそのとおりだろう。ただ、そうした違いは、あくまで叙された対象や情趣の質がことなっているということであり、創作上のテクニクとしては、むしろ相似したものであるというべきではないか。その相似したテクニクというのは、表面的な描写でおわらず、対象が有する気配や情感まで活写しようとする叙法である。

たとえば、前者の駢句についていえば、蕭綱は晩秋の長江

周辺をえがこうとした。ところがそのとき、無意識のうちに、戦争体験でつちかった感受性や観察力が發揮され、時候の変化を「零雨秋を送り」云々と清麗かつ繊細に叙した。その結果、読者が感じるのは、ただ空気の温度がひくくなってきたという、物理的な変化などではなくなった。晩秋の早晩、時候が意思をもって刻々とかわりゆき、冷涼な空気がそっとしのびよってきたという感覚を、読者はヴィヴィッドに感受できるようになったのである。

また後者のほうも、蕭綱は昼寝する美女をえがこうとした。そのとき、やはり無意識に同種の感性がはたらき、美女がうたたねするようすを「夢に笑みて嬌^え麗^{きよう}を開く」云々とコケティッシュに描写した。その結果、読者につたわってくるのは、ただ、陽春の午後、美女がやすやと寝息をたて、夢中で笑みをつかべているという、客観的な事実だけではなく、た。昼寝する美女のまわりに、ほのかににおいたつ、かすかな気配や情感、それらもなまなく感受できるようになったのである。

私は、蕭綱がかいた艶詩の魅力は、こうしたところに由来するのではないかとおもつ。蕭綱のえがく麗人や怨女は、ただ

絵はがき、すなわち、はがきに印刷されたような美女でなく、現にそこにいて、息をしているように感じられるようになった。息づく叙景ならぬ、息づく美女とでもいえようか。かくみてくれば、彼が艶詩の名手とされ、その指導者となったのは、ただその高位のためだけではなかったとせねばならない。これを要するに、戦争体験できたえられた繊細な感受性や鋭敏な観察能力は、建康帰還以後になくなってしまったのはなかった。書翰文はもとより、艶詩というあらたな土壌において、またべつな形態であてやかに開花した、といつてよいであらう。

参考文献

- 林田慎之助『中国中世文学評論史』『南朝文学放蕩論の美意識』（創文社 一九七九）
 『中華大典・文学典 魏晋南北朝文学分典』（鳳凰出版社 二〇〇七）
 牟華林『30年蕭綱研究述論』（四川師範大学学报）二〇一〇
 一）
 曹旭・陳路・李維立『齊梁蕭氏詩文選注』（上海古籍出版社 二〇一五）

（中京大学文学部教授）